

## 報告書

下記の通り講演会を開催しましたので、ご報告申し上げます。

### 記

1. 名 称 第4回「未来へのことだま」
2. 日 時 令和6年2月19日 16時30分～18時
3. 場 所 オンライン (zoom)
4. 講 師 株式会社浅井農園 代表取締役社長 浅井雄一郎様

### 5. 内 容

浅井様には「地域資源」と「先端技術」の活用による地域イノベーションの可能性についてご講演頂いた。

株式会社浅井農園は1907年に創業し、主にトマト、キウイフルーツの栽培を行っている。常に現状を科学する研究開発型の農業カンパニーとして、我々は何を行うのか。これを3つの理念を元に明らかにしている。①常に新たな農業モデルと技術開発を通じて新たな価値を創出する。いわば「ゼロ」→「イチ」を作り出している (R&D Oriented)。②農業を通じて、地域資源の活用や雇用創出を生み出し、地域の未来・人々の豊かな暮らしに貢献することで、循環型の地域社会をデザインしている (Local Oriented)。③「農業現場×経営×自然科学」を兼ね備えたアグロノミスト集団を目指し、世界中から多種多様な人財が集う (Diversity)。

また、現在株式会社浅井農産は大きく分けて3つの挑戦をしている。

#### ①育種・種苗研究

海外の種子会社の研究施設で育種されている優良品種を選抜し、日本で品種評価研究を行い、独自品種を開発している。これを通してオーダーメイド型のトマト栽培モデルを確立した。例として、房どりミニトマトや高リコピンミニトマト、子供たちのミニトマトなどを生み出している。

#### ②スマート農業技術研究

“農学”×“工学”など異分野融合研究を推進。国内外の企業や大学との共同研究を進め、“農業現場を強く”アップデートする次世代型の農業生産システムの開発に取り組んでいる。例として、植物体計測、光合成の見える化、栽培環境制御、自動運送ロボットなどがある。ここでは、生産量や品質に対する「最大化」とリスクや労務費、環境負荷の「最小化」を目標にそれぞれ4つずつの手段を導入した。「最大化」として高度施設

環境制御、データ比較共有、光合成チャンバー、補光 LED ライト。「最小化」としてトマト収穫ロボット、排液循環システム、労務管理システム、自動搬送ロボット。これら二つを管理するツールとして、スマーフィット、クロロフィル計測、動画マニュアルを導入しあさい農産のスマート農業を加速させている。スマート農業とは“各工程の最適化により最小のインプットから最大のアウトプットを生み出す農業生産システム”のことをいい、経済収支、労働収支、エネルギー収支、炭素収支の観点から、インプットとアウトプットを最適化し付加価値を最大化しているのがあさい農園特徴である。

### ③世界中の人々から必要とされる会社に

NZ ゼスプリ(南半球)と日本(北半球)の産地リレーによるグローバル青果流通モデルを構築し、緯度の異なる全国各地域で開発したソリューションや技術輸出に挑戦している。

これらの挑戦はあさい農園の役割として、「皆が豊かになる・ワクワクする箱をどれだけ作れるか？挑戦を通じて、小さな変化を起こし、新しい「文化」をつくる」につながっている。

## 6. 所感

7. 農大愛好会主催となる記念すべき第 4 回「未来へのことだま」の講師には株式会社浅井農園 代表取締役社長 浅井雄一郎氏にご登壇いただいた。

ビジョンにある「常に現場を科学する」が特に印象的でした。

農作業者というと、栽培管理一色で、生産にフォーカスしているのが現状だと思います。しかし、あさい農園さんは、研究者でもあり、科学者でもあると定義していました。この中には、常に消費者のためにより良いものを追求していることの表れだと思います。

また、目標や目的のゴール設定を常に明確に設定し、ゴールに向けたアクションが行われていました。そのためには、目的と手段を間違えないということがポイントのように感じました。

こうした、農業生産の技術よりも、経営の術を学ぶことができたことに感謝しております。

最後に、本講演会開催に漕ぎつけることが出来たのは経営者会議様のご厚意、ご支援のおかげであります。改めまして心より感謝申し上げます。

## 8. エントリー

今回は総勢 94 名のエントリー、また当日はエントリー以外からの参加も見受けられた。エントリー内訳は社会人が最も多く、全体の 69.1%を占めた。続いて 19.1%が学生となっ

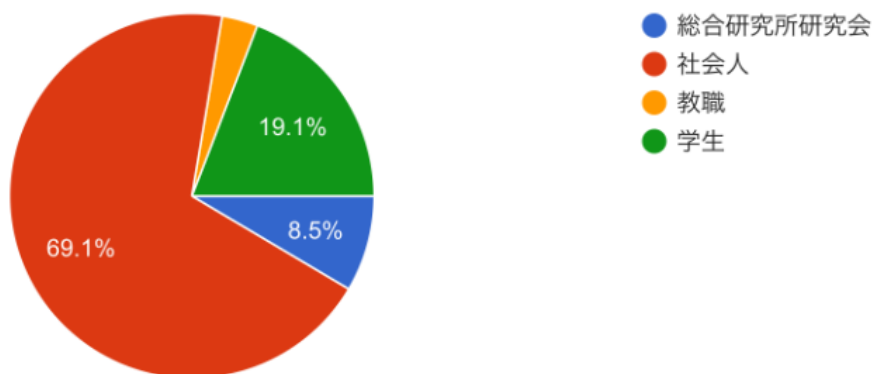
た。総合研究所研究会員内訳はイノベーション部会所属が最も多く、他にはマーケティング部、食農、データサイエンス部会の方がエントリーした。

今回ご講演いただいた、あさい農園では、農業の生産向上に向けた研究開発や、農業による地域課題に取り組まれているため、多数の農業関係企業の参加が見られた。

今回の改善点として前回の講演よりも多くの参加者に参加してもらえたことである。大学の案内から本セミナーの情報を知り、参加する学生が多く見られた。これから、もっと多くの学生に参加していただけるような取り組みを進めていきたいと感じた。また Facebook などの SNS を通して本セミナーに参加した方も今回は多くみられたので、引き続き SNS を活用し、知名度を上げ、第 5 回目の開催につなげたい。

## 所属

94 件の回答



以上